



三女オペラ 開高健

日本三文オペラ

著者略歴

1930年、大阪に生まる。
旧制大阪高等学校を経て 1953
年、新制大阪市立大学法科を卒業。
現在寿屋宣伝部勤務。
現住所、東京都杉並区矢頭町40

昭和三十四年十一月二十日発行

定価 二九〇円

著者

開高健 かい たけし

発行者

車谷弘 くるみ

印刷者

高橋武夫 たかはし たけお

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

万一落丁乱丁の際は
お買い求めの書店
又は発行所でお取
り換え致します

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

目次

第一章 アパッチ族

5

第二章 親分、先頭、ザコ、渡し、もぐり

49

第三章 ごつた煮、または、だましだまされつ

103

第四章 てんでばらばら

155

第五章 銀 が……

201

終章 どこへ？

271

装幀 坂根 進
寫眞 東松 照 明

日本三文オペラ

第一章 アパッチ族

「外では雨が降っている！」

「ところが頭の上では

小屋が燃えてる！

焼け死ぬことを思えば

濡れねずみになるぐらい

なんでもない」

一

あとで仲間から「フクスケ」と呼ばれるようになったひとりの男がすこし酔つたような足どりでジャンジャン横町を歩いていた。見たところは大きな男だが、すこし猫背で、穴のあいた水袋のように筋肉が骨のうんでたるみ、すつかり弱りきつていた。眼は乾いてどんよりかすみ、重そうな顎をたらし、紐のないかたちちんばの靴をひきずつていた。例によつて、ボロ切れ、空罐、藁のかたまり、ボール紙の切れつばしなどといった、すつかり正體のなくなつたものを背負いこんでいる。歩くところを見ると、まるでちよつとした塵芥山の移動である。さすが不潔好きのジャンジャン横町の連中も、この男がやつてくるのを見ると、眼をそむけた。職業はもちろん、家、子供、女房、道具、名前など、あらゆる屬性を失つてすでにひさしいということが一瞥してわか

つた。悪臭を發する都會のひき肉とでもいうよりほかに言葉が見つからない。どんな子宮からしかめつらで這いだしてこうなつたものか、さつぱり見當がつかない。むだなことは、まるで町工場裏の空地の、一年じゆう乾いたことのない、白内障でつぶれた眼のような水たまりにも似た男である。それが鉢のひらいた、子供くさい頭をして、ジャンジャン横町のもうもうとした匂いのなかでふらふらしていた。

ジャンジャン横町というのは大阪の「新世界」という場末の歡樂街にあるせまい路地である。

ちかくには美術館と動物園という、似たようなものが二つあるが、この豊饒ではじしらずな町にはなんの影響もない。新世界そのものは、美術館のある丘のしたにひろがつた、むらむらとした濕疹部、または手のつけようもなくドタリとよこたわつた胃袋とでもいえるようなところだから、ジャンジャン横町はそれにつづく腸管みたいなものである。フクスケはその腸管のなかを流れる青い夕靄の川のなかにただよつていた。ここ二、三日、彼はなにも食つていなかった。彼のねぐらは胃袋の入口にあたるような、動物園の植込みのかけにあつた。そんなところに寝起きしながら干されるといふのはすこし妙な氣がするが、事實であつた。軒なみ何十軒と數知れぬ飲食店をまえにしても、また、そこにウンカのような通行人の群れがあつても、一度なにかが狂いだすと豆一粒食えぬというのはしばしばありがちなことだ。恐慌の氣配をかぎつけると、フクスケは何度となくねぐらからでて新世界へ入つていき、ジャンジャン横町へもぐりこんでみた。塵芥箱、

殘飯山、哀訴、門附け。胃袋から腸へ、腸から胃袋へと、内側をつたつてだめなら外側へまわり、外側がだめなら東西に歩いてみる、それで効果がなければ今度は南北へ、ときには縦に、ときには横にと、おちつきのわるい不消化物のようにうろつきまわつたのだが、さつぱりききめがなかつた。こんなことはいままでに何度もあつて経験はいやというほどつんでいるし、飢えというじやじや馬のあしらいかたにもかなりの自信があつたので、はじめのうち彼はかるく見ていた。あわてることはあるまい、と思つた。ところが、夜、ねぐらにもぐりこんで、暗がりのなかでいざ相手にまわしてみると、たいへんな強敵だということがわかつた。今度の奴は妙にうぶで、しつこく、そのくせコソコソと技巧的なところがあつた。いきなり背骨のふるえそうなたまらなさでかみつくかと思うと、とつぜんはなれていなくなり、油斷をしていると今度はいつのまにか皮膚のなかへもぐりこんで石のようにズシリともたれかかってくる。おしのけようとしてもがきにもがいていると、つぎにはふいにめまいや吐氣となつて霧のなかへ追いかもうとする。相手は餘裕綽々とかまえているらしくて、そんな直撃や居坐りや煙幕などの正面攻撃のさいちゆうにときどき風のように擦過する熱さや川のようなけいれんなどの側面攻撃もまじえるのだ。汗がでて、眼がちらついた。フクスケは暗がりで體をまげたり、のぼしたり、とつぜん起きあがつてまた寢てみたり、思うまい思うまいと思つてみたり、逆にありとあらゆる皿と湯氣を思いおこそうとしてみたり、必死になつて惡戰苦闘したが、むなしかつた。夜があけるころには、すっかりぼんやり

してしまつた。公衆便所へ水を飲みにいこうと體をおこしたときには、まるで腰まで粘土に埋没してゐたような氣がした。彼は水を飲んで歸つてくると、日なたに這いだして、厚いかさぶたのような垢とあぶらに蔽われた、薄暗い體のなかにとじこもつてうつらうつら眠つた。夕方ちかくまでそうやつて土と日光のなかに半溶状態でゐたのだが、へとへとに疲れてよこたわつてゐると、そのうちになんだか、孤獨や斃死という、シラミのように慣れきつたはずのものが妙にドキドキした新鮮さで芝生や公園のなかをかすめて通るように思われだしたので、彼はふらつく足を踏みしめ新世界へ入つてゐた。

夕暮れの上げ潮にのつていつもの連中がいつものようにこの多汁質な濕疹部をめざして集まり、ぞろぞろ歩いてゐた。「すべてこの世は響きと怒り」というせりふはシェクスピアだつたと思うが、フクスケに教えてやりたいようなものである。この、新世界とジャンジャン横町というところは、まさに、年がら年じゆう夜も晝もなく、ただひたすら怒つて騒いで食うことにかかりきつてゐるようで、榮養と淫猥がいたるところで熱つばい野合をしてゐた。娼婦、ボン引、猥本賣り、めちやな年頃の大學生、もの好きざかりの中學生。ヒロポンの切れた三白眼。ばくちに負けた奴。ひとの財布を狙う奴。頭にいつぱい淫らな幻想のかけらをためこんだ工員。毛のついた内臓を生のまま頬張る人夫。なにやかやらが血と精液の充満したぼうふらの群れのようにひしめきあつてゐる。ニタニタ笑ひ、コソコソささやき、ギラギラにらんでゐる。

フクスケは道のはしを軒づたいにうなだれて歩いていった。ホルモン、すし、ライスカレー、ごつた煮、おでん、あめ湯、大福餅、天ぷら、シウマイ、酒まんじゅう、やきとり、カツ丼、かば焼き、にぎりめし、みそ汁、刺身。たがいにあいあいへしあい腫物のようにかさなりあい、くつつきあつて、いつせいに匂いをもうつと吹きつける。思わず藁みたいにふるえると、麻雀屋の窓でけたたましく陰惨な聲が「食うてこませ！」と叫んだ。映畫館の銃音。すし屋の大太鼓。パチンコ屋の軍艦マーチ。廢兵の君が代。そこへ擴聲器を切符賣場へもちだした劇場からは女のアクメのうめき聲がたちのぼつて町いっぱいにみちわたるのだ。もうすぐすればあちらこちらの壁に裂けめや穴のひらくのが見えるだろう。腸管は充血して酒精の熱い濃霧のなかでゆがみはじめるにちがいない。

はじめのうちフクスケは一軒ずつ店のまえでたちどまり、眺めたり、かいだりしていたが、そのうちにやりきれなくなつて方向轉換をした。彼は川のなかの石のようなものだつた。せまい路地には身うごきならなくらい群衆がひしめいていたが、さすが不潔で旺盛で物好きな横町の連中も彼の體からたちのぼるねばした惡臭にはたまりかねて、みんな體をさけ、彼がのろのろと通りすぎるのを道のはしで待った。フクスケは眼がかすんでいたのもそんなことはまつたく知らず、こんでいるわりには歩きやすいじやないかと思いつつ、あいかわらず塵芥山のようにうごいていった。ジャンジャン横町をでると新世界に入つたが、その空地には「性犯罪衛生大展覽

會」というむしろがけの小屋があつた。フクスケは入口に貼りだされた何枚かの寫眞をぼんやり見あげた。女を殺したうえにバラバラにして髪をそつくり剃ぎ、山小屋へかけこんでそれを頭からひつかぶつてゴム長はいたまま首を釣つた男だとか、なんだとか、とほうもない情熱の持主の寫眞であつたが、いずれも何回となく複寫して現像したものらしく、ただもやもやと黒いものと白いものが映つているにすぎなかつた。強姦された女の裸の現場寫眞も一枚まじつていたが、局部には絆創膏が貼られて見えないようになつていた。フクスケが眼をちかづけてこまかく觀察すると、あきらかにそれをひつ剃がそうとしたらしい爪の跡がいくつもついていて、絆創膏は手垢によごれて薄黒くなつていた。フクスケはのろろと手をあげ、ヤットコみたいのびてまがつた爪で剃がしてみようと一、二度試みたが、剃げそうになかつたので、すぐあきらめた。この小屋にはほかにもつとおもしろいものがあるように思えたが、入場料の十圓がなかつたので、すぐはなれた。

それからフクスケは舗道のぬかるみからしみだした影のようにゆつくりとうごきつつ、煮こみかカレーライスの大鍋のなかであぶらの泡が浮いたり、沈んだり、重いためいきついたりするのを眺めて時間をつぶそうかと思つたが、いまの體ではそんな刺激は

(ごつすぎて……)

とてもたえられないような氣がしたので、あきらめることにした。

ほかになにか飢えをまぎらすものはないかと思つてとぼとぼ歩いていると、ある人けのない路地の暗がりには二、三人の男がしやがみこんで、クスクス笑つていた。ぼつと明るくなつたかと思ふと、すぐ暗くなる。その明滅のたびに

「さあおしまい」

「もう十圓」

というような聲がして、また明るくなる。八卦見でもなければ猥本屋でもなさそうだ。が、女の笑聲が聞こえて

「あつちつち、もつとはなしいな、火傷するがな」

といつたので、フクスケは

(また、やつとおる)

と思つた。いままでに何度かいま見て彼は女のそれがどうなつてゐるかということをよく知つていたが、やつぱりのぞきにちかづいていつた。この界限ではそれを「マッチ一本」と呼んでいた。やつぱりひとりの男が食うに窮して、これまた飢えとつるみあつてゐた女をひとりさがしだしてきてはじめた商賣である。彼と彼女は徳用マッチ一箱だけをもつて、毎夜、町にでた。彼らは後暗くて襷の多い新世界のなかでもいちばん暗くて忘れられた場所を選びだして、およそこれ以上落ちようのない簡単な仕事をやつていた。

フクスケはこつそりちかづいた。塵芥箱のかげの、むんと悪臭のたちこめた暗がりにとりの中年の氣ちがい女が寝ころんで膝をたてていた。客の酔っぱらいがマッチをすつてちかづけると、黄いろくたるんだ二本の腿の奥に蟹の鋏が見えた。それは腐りきつて變色し、だらりとひらいて、どこまで通じているのかわからないような暗い穴があいていた。酔っぱらいは體をぐらぐらさせ、十圓だしてはマッチをすり、マッチが消えるとまた十圓だす、というようなことをつづけていたが、彼は目的のものをちつとも見ていなかった。會社歸りの仲間らしい男たちが、マッチをゆらゆらさせている彼の手をつかまえてジッと虫食いだらけの古い果實を照らしださせようとしたが、いつも、やつとつぶさに眺められるかというときになつて火は消えた。男たちは舌打ちし、女はゲラゲラ笑つた。マッチがつくたびに争いあつて、小さな、深い洞穴のなかへ首をつつこもうとあせる男たちのうしろから、フクスケはなにげなくのぞこうと首をのぼした。が、その瞬間、いきなり

「ただ見るな！」

低い、殺氣にみちた聲が走つて、フクスケはつきとばされた。男の顔を見ると、いまにもつばを吐こうと口のなかで舌をうごかしているらしい氣配があつたので、フクスケはよろよろともつれそうになりながら逃げだした。男はすぐ仕事にもどつたらしく

「……家へ歸つてよう研究してみなはれ。しろうとの奥さんはこんなことになりまへんよつてに、